

熊本県小国町の共有林野における 住民の選択的クヌギ植林

佐藤 ゆきの

人間一環境系を人間の生業活動をとおして探求する環境利用研究へのアプローチには、近年環境利用と植生、環境利用と認識、環境利用と社会の3つがある。しかし、この3つのアプローチはそれぞれ独自の方向を進んでおり、この分野での問題設定・解決方法は未だ模索の段階にある。

本研究の目的は、これらのアプローチを相互に結合させ、住民の生業活動をめぐる諸要素と住民の環境観、そしてそれらの変化と実際の土地利用、植生との関わりについての包括的な考察を行うことにある。そのため、対象時期は戦後を中心とし、地域は戦後土地利用の大きく変化した熊本県小国町大字下城上組の90戸の集落とした。住民の環境観をとらえる方法については、住民からの聴き取りを中心に、実際の彼らの行動とそれに対する彼ら自身の理由づけからの読み取りを試みた。

阿蘇外輪の北麓にあたる小国町の旧来の土地利用は、谷底平野に集落、その周辺に田畑と豪農の育成してきた若干のスギ林、そしてその外側に、一戸に数頭ずつ飼育されていた役肉牛に関連する採草放牧地兼薪炭林としての町有牧野となっていた。昭和34年この牧野は個人へ払い下げが行われたが、それによりもともと個人的利用がされていた干草場では実際に個人分割が進み、全国的な植林ブームによって伝統的な特産品であるスギが急速に植林されていった。その結果、町には「スギは財産」という強いスギへの価値のおき方が定着し、この認識は現在町民全体に共通するものとなっている。一方の朝草場は、完全共同利用であったこと、集落の薪炭林であったという事情から造林組合の所有となり、当初は従来通り採草放牧が行われていた。しかし、牛がだんだん減っていくにつれ、悪い土地とされたところから順次シイタケ原木として利用するクヌギが植林されていった。スギが特産品として地位を確立しているこの地域で、あえてクヌギが次々に植林されていった理由は、住民の論理では、「クヌギはスギよりも日照を遮らない」という消極的なものであるが、夏場に陰をつくるという点ではさほどの違

いは認められない。むしろ、町の意向に関わらず牧野が実際には徐々に放置されていったという事実、そしてそのため放置された牧野でクヌギの二次林への遷移が進み、荒れ始めたの防ぎたいということが実際には大きかったものと考えられる。これは、遷移の状況の追認であり、そこにはかつて最も日常的に接していた牧野の植生すなわち広葉樹への高い評価も反映されている。住民は一律に「クヌギの値上がりによって植林には熱が入った」と語るが、実際の価格上昇は最初の植林時期より10年程後である。植林開始期には幅がありその間にクヌギ価格が上昇していったため、このように感じているのであろう。昭和60年、一部の林がコンクールで農林大臣賞を受賞したことで、さらにこの認識は強化されていった。このように彼らのとった行動は経済的要因では説明できないわけで、そこには土地や土地利用に対する住民の価値観・環境観が大きく影響していると考えられる。すなわち、クヌギ植林選択の背景には、住民の環境に対する認識があるということである。

このような住民の意識と現実とのずれは、個々の地区・植生に対する行動にも現れている。一つは、クヌギ植林地でみられるササ類の蔓延に対しプラスの評価が与えられていることである。彼らは、牛が好むササ類が林床を独占することに対し荒れているとの認識はもっていない。野焼きが行われなくなってからグズやカラムシといった多年草が林床で優占していることに対しても、彼らが肥沃地に生えるとの評価から、野焼きは土地の肥沃度を落とすと考えている。また、彼らは現在ミズナラ・コナラが優占している朝草場北部に対してはやせ地と評価しているが、その評価には早期にクヌギを植林したが育たなかったということに加え、かつての利用度の低さから草の更新が悪かったことが一因となっている。住民は自然発生したナラ類をそのまま維持管理しており、この行動は結果として草本植生の多様性と水源涵養林としての広葉樹の自然林の保全に貢献しているのである。